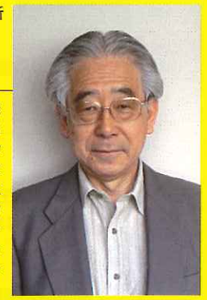
一楽照雄氏の思想と有機農業

NPO法人兵庫農漁村社会研究所
理事長・神戸大学名誉教授
保田 茂
やすだ しげる



1939年生。2003年3月神戸大学農学部を定年退職。現在、神戸大学名誉教授。NPO法人兵庫農漁村社会研究所理事長、兵庫県・食の安全・安心と食育審議会会長、コウノトリ野生復帰推進連絡協議会会長として活躍。おおや有機農業の学校、JAたじま・やさしい有機農業教室、神河有機農業教室など県下8カ所で有機農業教室を開設、有機農業の普及にも尽力。

本物の農業、本物の協同組合

「保田君、母乳を汚すような食べ物が、本物の食べ物と言えると思うか?」。〝いえ、それは違います。〟「本物の食べ物ではない食べ物を産み出す農業が、本物の農業と言えると思うか?」。〝違うと思います〟。「本物の農業ではない農業を推し進める農協は、本物の協同組合と言えると思うか?」。〝問題あると思います。〟「母乳を汚すような食べ物を平気で消費者に販売する生協は、本物の協同組合と言えると思うか?」。〝確かに間違いだと思います。〟「君もそう思うだろう。だから有機農業を進めているんだよ!」。

1974年(昭和49年)の夏、私が35歳の時、日本有機農業研究会の月1回の定例研究会が終了し、帰りの夜行バスに乗るべく東京駅に向かおうとしている時、一楽照雄氏に誘われ、氏が理事長をされていた協同組合経営研究所の真向かいのレストランに連れて行っていただいた。怖い大指導者だけに、一度は辞退したが、どこかで食事をするんだろう、いいじゃないかとすすめられ、観念してカレーライスをご馳走になった。その時、おずおずしながら尋ねた私の質問に、睨むようにして答えてくださった氏の言葉である。

全国農協中央会の生みの親のお一人であり、農林中央金庫の部長から新しく誕生した全中の理事、常務理事を長く務めてこられた農協組織の大先達が、高齢にもかかわらず、1970年1月に大きく報道された母乳の農薬汚染の記事を契機に、先陣切って有機農業を提唱し、世論に抗して有機農業の普及活動を進めておられる姿に感動するとともに、なぜ、農協が販売品として扱っている農薬や化学肥料が有している問題を堂々と指摘し、これら資材を不要とする有機農業を提唱されているのか不思議だったのである。

この怒りを込めたような話しぶりに身が引き締まる思いであったが、お話を聞いて、一楽照雄氏のお考えがすんなりと理解できた。氏は根っからの協同組合人であり、環境や健康を損ねる公害のような資本主義の矛盾を、本来正すべき役割を担っているはずの協同組合が、資本主義の矛盾を自ら拡大するように、環境や健康に問題を及ぼす農薬や化学肥料を大量に使用し、利益追求に走っている姿が許せなかったのである。一楽照雄氏が提唱する日本の有機農業の原点は決して難しい話ではない。環境や健康を守る本物の食べ物、それを作り出す本物の農業、本物の農業を推し進める本物の農協、消費者に本物の食べ物を届ける本物の生協を再構築することを目標とされていたのである。そして、高齢にもかかわらず、その目標実現のために奔走されていたのであった。残念ながら、農協も生協も一楽思想を積極的に受け入れることはなく、1994年に87歳で一楽氏は亡くなったが、この思想は今でも大切にされるべきであろう。一楽照雄氏を知る人も少なくなったので、あえて協同組合に関係する皆さんに伝えておきたいと思う。以来、私は一楽思想を実現すべく、有機農業の活動を継承していこうと決意したのであった。本物の食べ物、本物の農業、本物の協同活動の実現のためにである。35歳の時であった。

天地有機の世界

日本有機農業研究会(当初は有機農業研究会、1976年に改称)設立当時(1971年10月)、有機農業という言葉は日本語にはなかった。したがって、この言葉の由来にも関心があり、一楽氏にお尋ねした。丁度、時期を同じくしてアメリカでOrganic Agriculture Movementと呼ばれる運動が誕生し、活動を展開していた。直訳すれば有機農業運動であり、ここから言葉を引用されたものと思っていた。「確かに参考にはしたが、日本には天地有機という言葉があり、この言葉は大自然には法則があるという意味であり、本物という意味がある。ここから引用した」とのことであった。実はこの天地有機という言葉は一楽照雄氏が尊敬する協同組合運動の先覚者・黒澤西蔵氏から学ばれた言葉であった。天地有機は日本語で「天地に機有り」と読む。天地は大自然。機とは機会(時)や機械(仕組み)に用いる如く、時や仕組みの意味であり、総じて法則という意味である。つまり、大自然には時あり、仕組みあり、つまり法則ありと解釈できる。一楽氏は有機農業研究会を立ち上げる時、「本物の農業研究会」としたかったと言われているが、有機という言葉を天地有機ととらえれば本物という意味になるとの黒澤氏の助言で有機農業研究会の名称をお使いになった経緯がある。

天地有機の世界、つまり大自然は絶えず生々として繁茂し、農薬や化学肥料を用いなくとも樹々は逞しく生長を続けている。春には芽を吹き、秋には落葉する。この法則を可能としているのは、樹々は自らいい土を作る力を有しているからである。そのいい土とは腐葉土であり、腐葉土と同じような土を畑に再現すれば野菜も農薬や化学肥料を必要としないはずである。この天地有機の考え方が日本の有機農業の考え方の基礎にあることを知る人は必ずしも多くはない。有機農業は有機物を使う農業だからとか、外国の思想だと評価する人も少なくないが、一楽照雄氏が目指す有機農業は天地有機という言葉に由来していることをしっかり認識しておいてもらいたい。

この法則は言い換えれば循環の法則になる。樹々は根が吸い上げた養分を葉の形にして繁茂し、秋には落葉する。落葉した葉は小動物、微生物の力によって裁断され分解され、やがて土に返る。決して土は痩せることはなく、炭酸同化作用で合成された炭水化物が確実に増える。つまり、山の土は年々肥沃になるのである。一楽氏が理想とする有機農業の技術的基礎はこの循環を大事にすることであった。結果として、堆肥を重視し、土から出たものは土に返す有機物重視の技術が求められることになる。ここから表面的には有機農業は有機物を使う農業に見えるが、それは天地有機の原理の結果として有機物を重視するのである。そこを見誤ってはならない。この天地有機の原理に基づく農業こそが本物の農業と一楽氏はとらえていたのである。

生産者と消費者の提携

一楽氏の次なる大事な思想は、生産者と消費者の提携という考え方である。次第に全国に有機農業実践者が増え、有機農家の生産物を責任もって購入する消費者も増えるにしたがい、有機農業運動は次第に有機農産物の共同購入活動と軸を一つにするようになる。有機農産物は市場性を持たないし、やや手間のかかる農産物はそれなりの価格の実現が必要となる。必然的に生産者と消費者との直接的な流通が求められる。こうした直接的な取引は産直と言われてきたが、単なる物の取引ではなく、生産者は消費者の健康を思いながら有機農産物を生産し、消費者は時には手間のかかる除草の手伝いに出かけたり、農産物の分配を自分たちで引き受けたりと感謝と信頼の軸の上に関係が成立する。これを提携と呼んできた。私はこれを産消提携と表現した方がいいと考えているが、ともかく、一楽氏はこの提携こそ本物の協同組合の新たな誕生とみてこられたようであった。

この自然発生的に誕生した提携こそ、生産者と消費者が一体となった協同活動であり、農薬や化学肥料を用いずして生産された農産物が市場性を持たなくても、消費者が正当な価格で組織的に購入すれば、まさに安全良質の食べ物、つまり、本物の食べ物の生産が実現し、それが社会性を持つこととなる。さらに、この本物の食べ物を産み出す農業こそが本物の農業であり、この農業を推進する本物の協同組合活動が構築可能となる。一楽氏が期待する本物の食べ物、本物の農業、本物の協同組合の実現をこの有機農業運動に懸けてこられた理由である。この信頼を基礎とする生産者と消費者の、提携の思想は今日の協同組合運動にも反映されるべきであろう。

一楽氏が亡くなって20年以上の年月が通り過ぎた。氏を知る人も次第に少なくなってきたが、いま、あらためて我が国の食べ物や農業、協同組合に本物性を問われる時代が来ているように思える。もう一度、一楽氏が提唱してこられた本物の食べ物、本物の農業、本物の農協、本物の生協とは何か、協同組合に連なる皆さんに真摯に考えてもらいたいと思う。